



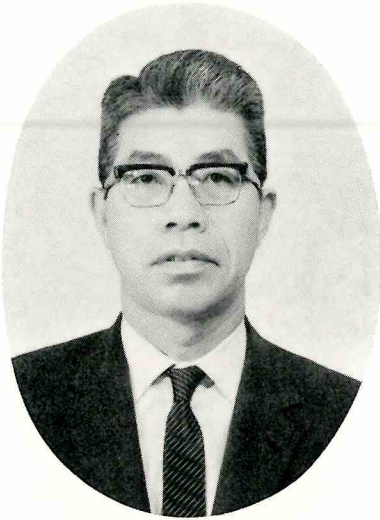
表紙によせて：昭和54年6月2日通水式を終えた野洲川放水路

### 1979. 10

支部長のことば／15年遅れた関西の  
通勤投資／野洲川放水路事業の概要  
／大学における土木教育／地方だ  
よ／広報

## 「攻め」と「守り」の土木

土木学会関西支部 支部長 岡田 清



攻撃は最大の防御であるという。そして攻撃には多くの危険性を伴うが、それが成功したときの華やかさはわれわれの満足感を充足させてくれる。息づまる投手戦より、長打力による打撃の応酬に野球ファンは熱狂し、そこにはダイナミックな試合展開がある。どんなに攻撃力が優秀でも守備が穴だらけではそのチームは決して勝利をうることはできず、またいかに堅固な守備陣を誇っていても打力が不振では、これまた相手を制覇できない。「攻め」と「守り」のバランスこそが試合に勝つことの必須条件である。これはあらゆることに通用する原則である。

遠い昔、人々は風雨からのがれるための住居をつくり、地震を大地の神の怒りと怖れ、強風や洪水の天災には安全な所へ避難するなど、専ら守りに終始した。

それが都市国家が育つ時代に入って、人々は治山治水、交通の整理、住居の充実など、人間社会の発展と開発のために自然に対する積極的な技術を展開し、これら技術の蓄積こそが土木工学の源流となった。

日本における土木技術の社会への貢献も、広く深かったが、近代における力学概念に基礎をおく近代科学技術が欧米から直輸入され、それらが狭いわが国土に高密度に結実され、日本の土木技術は世界一流にまで向上した。そこには大型土木機械による多くの大ダムの建設、東海道新幹線、名神高速道路を始めとする多くの高速道路、多数の臨海工業地帯の育成、大都市周辺のニュータウンの建設等があり、これこそが人々の生活向上の基礎であるとして、技術崇高主義をモットーに自然を徹底的に攻めまくる「攻め」の土木の輝かしい成果があった。

しかし何事によらず、一方への攻撃力にすぐればすぐれるほど他方への被害も大きい。今日、土木技術者が土木建設にともなう環境や住民問題という新しい課題に真正面

オカダ キヨシ  
岡田 清

生年月日 大正12年1月2日  
本籍地 京都市東山区  
最終学歴 昭和20年 京都大学土木工学科卒  
職歴 昭和20年10月 京都大学助手  
昭和22年12月 京都大学講師  
昭和24年12月 京都大学助教授  
昭和33年4月 京都大学教授  
現在にいたる  
現住所 京都市左京区吉田近衛町22-5

からぶつかって悪戦苦闘している現状はまさにこれである。

騒音、振動、排気ガス、水質汚濁、日照、電波障害、等々の公害問題、すなわち今まで土木技術者が広域的には人々に生活の向上と幸福を与えるはずのものと信じて、自然に対し攻撃的に技術を駆使して達成した土木事業がもたらしたこれら問題は、土木技術者に新しい視点からの解決を要求している。これには従来の土木技術、いや自然科学的手法のみでは解決や解釈できない様々な要素、とくに社会科学、医学、宗教、哲学、心理学や歴史的背景、など人間同志や人間と自然とのかわりに関する多くの要素が含まれている。また最近における複雑な社会的情勢を背景に人々の価値観は多様化し、自然生態への関心はいよいよ強くなっている。

視点をかえれば、エントロピー極大に向って膨張する自然宇宙の中に生きて、われわれはエントロピー減少の方向こそ人間社会の発展につながるとして生産、流通、交通、管理等、様々な面で秩序化、組織化につとめてきた。そして土木事業はその根幹的役割を果たしてきた。しかしながら、この方向のみへのばく進に大きな見落としがあり、ある種の自由度の増大、すなわちエントロピー増大が人間社会の発展に必要であることが叫ばれている。このことは人間社会が自然宇宙と生物システムとの両方の発展方向を含む複合システムとしてとらえるべきであることを示している。そしてそれを全体としていかに調和させるかが問題であり、その矢面に立たされているのが土木技術者であるといっても過言ではない。ここでわれわれは自然との協調による文明の確立こそ土木事業本来の目標であったことを改めて確認し、従来の攻めの土木技術から守りの土木技術の構築につとめる必要があるとされるゆえんである。

守りの土木技術は攻めの土木技術に比べ決して華々しいものではない。しかしその裏付けのない土木事業は今後はもう成立しないことは明らかである。社会発展に直接的な責任を負う土木技術者の新たな誇りを自負するとともに、その責任の重大さが愈々痛感される。この意味において学会支部の諸活動が、「攻め」と「守り」の土木技術発展の一里塚として貢献し、またこれを会員の皆さんが活用されることによって、明日への新しい情熱をもやされるよう希望して止まない次第である。

# 15年遅れた関西の通勤投資

岡部 達郎\*

## 1. はじめに

日本最初の鉄道が、新橋―横浜間に開通してからすでに本年で107年を経ている。その107年の間に国鉄をとりまく情勢は、自動車、航空機の著しい発達により大きく変化し激しいものになっているが、国鉄はその107年のあいだ適切な対応をしていただろうか。

途中の紆余曲折はあったとしても、弱電メーカーは、鋳石―真空管―トランジスター―IC―LSIと着実に技術革新を行ない、古いものは捨てさり新しいものを作るいわゆるスクラップアンドビルドによって企業の体質改善をはかっている。

一方鉄道といえば、人力車―馬車鉄道―市電―在来鉄道、地下鉄―新幹線、新交通システム―リニアモーターカーとなるほど技術革新は点でとらえてみればなされているが、ネットワークで考えてみるとはたしてどうであろうか。二本のレールをもった在来鉄道にも二種類あって、単線区間を気動車一両で数人の乗客を時速20~30kmで走るものもあれば、複々線で1列車10両編成4,000人の乗客、また1,000tの貨物列車を時速80kmで走っている路線もある。

つまり今の国鉄は、鋳石ラジオや人力車など古き時代の施設をたくさんかかえているなかで、新幹線の経営も行なっている現状にある。いつまでも人力車をかかえることにより、都市鉄道や新幹線を育てることができない状況があり、スクラップがない状況がつづく、悪貨が良貨を駆逐することになりかねない。よく毎年8,000億もの赤字を出す倒産企業が投資を行なうのは納得がいかないということを開かされるが、百年の歴史をもっている施設の中には老朽化している設備もあり、鉄道としての機能を発揮できる分野には効率的な投資をはかることが、公共輸送機関としての役割であり、将来の世代

に感謝されることにもなる。

## 2. 関西の国鉄

「関東は国鉄が発達しているが関西は私鉄が発達している。」ということをよく聞かされるが、この表現はむしろこういべきであろう。「関東は国鉄の投資がすすんでおり、関西は著しく投資がおくれている。」人力車でもって私鉄に対抗しようというのは、初めからかなわないのに決まっている。

いま国鉄、私鉄の併行路線で特に格差が大きい福知山線と阪急宝塚線について全路線延長について電車本数と輸送人員について整理したのが、図-1である。これをみると国鉄が竹やりでもって戦車と競争している状況がおわかりになると思う。

こういう事態に対して関西の国鉄は、今まで施策をほどこそうとしていなかったのかというとは実はそうではない。昭和39年8月当時の関西支社で作成した「国鉄輸送の現状と新長期計画」という冊子の中で現在工事中の片町線、福知山線、またいろいろ話題となっている山陰本線や大阪外環状線などの都市通勤線増については、昭和45年までに完成すべきであるという提言

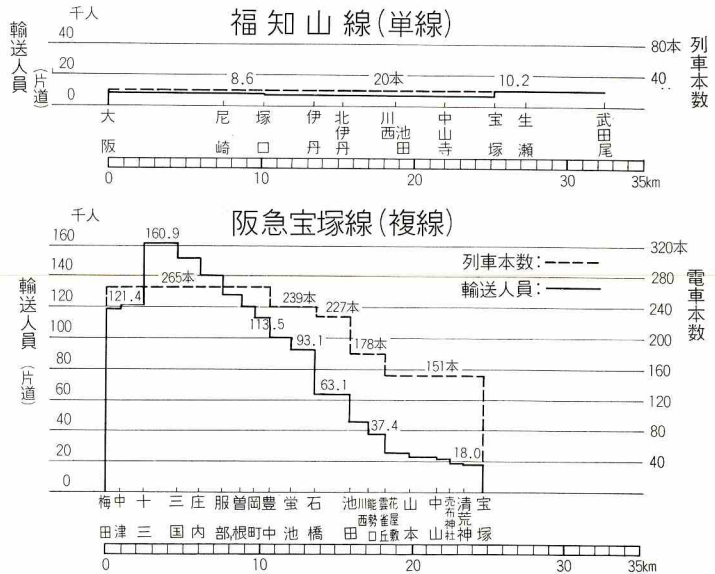


図1 福知山線、阪急宝塚線運輸概況の比較



# 野洲川放水路事業の概要

豊田 高司\*

## 1. 野洲川の概要

野洲川は近江太郎と呼ばれ、東海、東山、北陸の諸道に通ずる沃野を育てた河川であるが、一方、上流の美林地帯は、平城平安の昔、宮城仏閣造営の木材の調達による乱伐によって荒廃が進み、風化した花崗岩地質ともあいまって多大の土砂を流出し典型的な天井河川となっている。このため、現在の南北流が固定した14世紀から今日まで約10年に1回の割合で災害が発生しており、明治以後においても10回程度の災害を受けている。中でも昭和28年9月、台風13号の出水による被害は甚大で破堤4ヶ所、流出半壊家屋1,700戸、農地湛水800haで、これが契機となって抜本的改修が強く要望され、昭和33年直轄調査が開始され、同40年に直轄河川となり改修が法定された。また、本事業は、昭和46年に策定された琵琶湖総合開発事業の一部として組み入れられている。

野洲川は、流域面積387km<sup>2</sup>、幹線流路延長約60km、羽毛状の流域で、琵琶湖に流入する約160本の河川のうち最大である。その源は、滋賀・三重県境鈴鹿山脈の最高峰、雨乞岳(1,238m)に発し石部にて平野部に出て三角洲を形成し河口付近で南北流に分派している。年間平均降雨量は約1,900mmで花崗岩及び第三紀堆積岩よりなる山地、丘陵よりなっている。上流部では、明治時代に直轄砂防事業による植林山腹工事が実施されているほか、野洲川ダム(かんがい用、高さ55.7m重力式コンクリートダムS26年竣工)、青土ダム(洪水調節、都市用水、ロックフィルダム、工事中)石部頭首工などの利水事業が行われている。

## 2. 治水計画の概要

基本高水のピーク流量は、当初、昭和28年、33年、34年の出水を検討の結果、28年の実績値(日雨量240mm約1/70)を参考にして、2,600m<sup>3</sup>/sと定められ、河道計画が進められたが、途中、昭和40年9月、台風24号の出水はほぼ2,600m<sup>3</sup>/sであったため、基本高水の再検討が行われた。

すなわち、安全度は、流域の重要度、他河川とのバランス等から年超過確率1/100とすることを基本として、検討が行われた。安全度は日雨量で表すこととし、明治29年～昭和43年の日雨量をGunbel法により統計処理して350mmとした。洪水追跡は貯留関数法により、8流域、4河道の定数を33年8月、9月、34年8月、9月、40年9月の各洪水の実績ハイドログラフにより検証して決定した。計画降雨型は、28年9月、34年8月、9月、40年9月、モデル降雨(各時間雨量がすべて1/100)の5タイプとし、実績降雨の引き延ばし方式を採用した。飽和雨量を100mmとして計算した結果ピーク流量は、3,800m<sup>3</sup>/s～4,500m<sup>3</sup>/sにバラついたが最大値4,500m<sup>3</sup>/s(28年タイプ)を採用した。また、前述青土ダムの洪水調節効果は木川基準地点に対して微少であったので、4,500m<sup>3</sup>/



図1 野洲川流域図



## 土木の視界

## 大学における土木教育

丹羽 義次\*

土木学会関西支部長より標記の題目で“支部だより”の原稿の執筆を依頼されたが、筆者は第4期の大学土木教育委員会の成果を“技術教育・明日への課題”と題して、土木学会誌、64巻、3号、pp. 20~26、1979に報告した直後であり、この拙論以上の知識を持たないので固辞したが、再度のお願いもあり、また最近土木計画学研究委員会の依頼でその第13回シンポジウムにおいて、“土木工学における計画学教育のあり方”に対する私見を述べ、ご討議を頂いた経緯を踏えて、いま一度お役に立てそうな気がしてきたので、結局お引き受けすることとなった。

さて前置きが長くなったが、大学における土木教育のあり方に関する一般論については、上述の報告をご高覧の上、活発なご討議をお願いする次第である。ここでは、本稿において筆者が特に力説したい最新の考え方を展開するために必要な最少限度の事項のみ再録する。

まず大学における土木教育を論ずる前に、大学教育の大衆化の現状を十分認識しておかねばならない。現代社会では、価値観の多様化、各分野での専門化・高度化が急速に進行しており、この現象を背景として、高学歴社会への志向により、いまや大学への進学者は同年齢層の39%にも達しており、今日では大学教育は著しく大衆化されている。そしてこれに伴い、学生の能力、適性、学習意欲、関心、興味等にも著しい差を生じ、一部の大学では従来通りの一律教育に困難さえ感ぜられるようになり、能力別教育論や分野・方向別教育論が盛んに論議される現状を招来し、また多数の無気力学生が在籍

する状況となっている。これらの事実こそ大学土木教育のあり方を思考する過程で、決して忘れてはならない重要事項なのである。

### 1. 人間教育

土木教育以前に、大学における教育は人格の完成を旨とした人間形成教育でなければならぬことは当然のことであり、“国家・社会の形成者として”、“相互の理解・連携のため”、“社会の進歩に対応するため”、“国際社会で活躍するため”、等々の理由から、次のような人間形成が強く望まれている。

社会的活動能力（広い常識と道徳性のある偏らない公民教育による公共マナーの修得）、豊かな人間味のある人間性、協調性、適応性、積極性、創造性、自主性、責任感、研究心、等々を身につけること。

### 2. 土木教育

#### (1) 意識教育

土木工学がわれわれの生活基盤の整備・社会発展の基盤の充実、すなわち公共施設整備、公共福祉の向上を旨とした市民のための総合工学であることから、“土木工学に対する社会的要請に応える使命感の育成”、“土木技術者としての情熱（生き甲斐）と誇りと自信をもたせる教育”、“技術問題解決のための積極姿勢の養成”等の意識教育がきわめて重要である。

#### (2) 技術教育

(i) 基礎理念：土木技術の本質からして“自然現象を忠実に把握する能力の養成”、“自然との調和を考えた教育”、“物対物でなく、人

間対物の関係を考える教育”，“総合的・多角的判断力の養成”が必須である。

(ii) 基礎科目か，応用科目か：いずれに重点を置くかという問に対しては，思考能力の啓発，創造性及び応用性能力の育成のため，基礎科目重点教育が強く志向されている。

(iii) 学理教育か，実務教育か：本来大学は学理の教授に徹した教育をしておればよいと考えられるけれども，上述の通り大学の大量化に伴って，最近では大多数の大学で，程度の差はあるが現実問題として，学生の就職を意識した教育（ここでは仮に実務教育とよぶ）をしなければならないと考えられている。

以上のように大学における技術教育としては，(ii)との関係において，(iii)をいかに考えるかによって，中広く変化に富んだ各大学特有のカリキュラムが編成されることとなる。（この場合あまり好ましいことではないが，もちろん各大学における教育スタッフによっても，カリキュラムが強い影響をうけることを避けることができないことは云うまでもない。）今日まで，ともすれば新制大学が志向してきた旧帝大志向型教育（上述の学理教育）は，大学教育像としては理想的であるかも知れないが，大学教育の大量化の進んだ現在においては決して現実的でなく，その各大学の置かれている状態（たとえば学生の資質，就職先等）に即した，そして(i)の基礎理念を踏えた土木教育理念の確立が必要である。

さて話は変わるが，人間というものは“やる気”を出せば，どんなことでも案外苦しみを忘れて楽しく，生き甲斐を感じ情熱を持ってやれ

るものである。在学中ほんとうに無気力であった学生が卒業と同時に企業に入って，人が変わったように熱心に仕事をするものがあることは，われわれがしばしば経験することであり，何か大学教育に欠けているのではないかと反省させられる。

このように思考してみると，土木技術者はまず土木技術以前に，上述の通り市民の道路，鉄道，水道，電力，等々に対する期待にわれわれが応えるのだという使命感に溢れ，情熱をその仕事に傾注する気迫，すなわち，“やる気”がなにより大切である。多くの大学に多くの無気力学生が在籍する現況にあって，彼らに“やる気”を起させる土木意識教育こそ大学土木教育の心髄といっても過言であるまい。

したがって，この意識教育のためには，多くの大学で専門科目の履修に先だって低学年のカリキュラムに組み込まれている土木工学概論（通論，総論）という科目は，単に今後学生が履修してゆく科目の前座的ないわゆるプレクイジイトとしてでなく，土木技術者としての高邁な意識の涵養と，(2)(i)で述べた土木技術教育の基礎理念の修得の場としてカリキュラム上に位置づけられるべきである。そして，同時に，筆者が浅学であるためか，上述の観点に立脚した意識教育書として編纂された土木工学概論（通論，総論）は知らないのでも，一時も早く，学識経験豊かな諸代の叢知を集めた，若い青年土木技術者の血をたぎらせる著書の編纂が強く望まれる次第である。

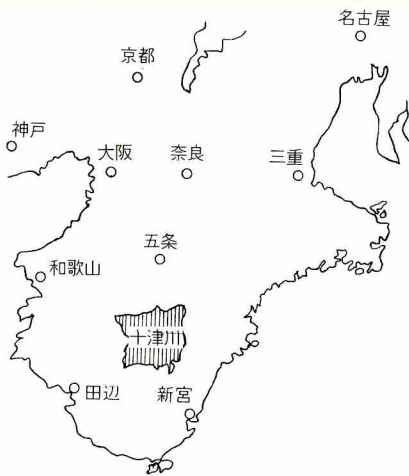
\*京都大学教授

土木学会大学土木教育委員会第4期委員長

## 地方だより

## 十津川について

古久保 勲\*

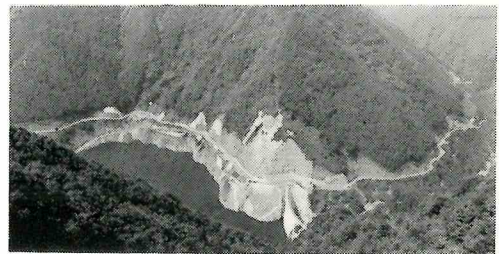


十津川村は、紀伊半島の中央部にあり、奈良県の最南端に位し、面積は県の1/5 (670 km<sup>2</sup>)もある。村の中央を南流する十津川にそって、国道168号が村内だけで約60 kmも走っており、日本屈指の巨村である。その96%が急峻な山林であって、海拔1,000 m以上の峻峰が連なっており〔近畿の屋根〕と称され、わが国の三大秘境の一つに数えられている。明治の頃から12,000人を数えていた人口も、過疎化の一途をたどり、現在では8,000人を割り、人口密度も12人という典型的な山村である。しかし、この村は古くから由緒ある歴史を有し、神武御東征以来、数々の国事に参画し、中でも南北朝時代や明治維新における十津川郷士の活躍は、めざましいものがあった。明治6年の地租改正までの間、十津川村は税を免除されていた。いかに忠勤であったか今でも盆踊で〔とんと十津川ご赦免どころ年貢いらすの作りどり〕唄い継がれ、その歴史を物語っているようである。又、この村には、一つの寺院も一人の僧侶もない無寺村である。明治のはじめ公布された神仏分離令によって廃仏毀釈が行われ、それまであった51寺院を全村が徹底してこれを焼払い、これまでの仏祭を神祭にかえた。その後一寺も再建されることなく、村民あげて神道大社教を信奉す

るようになった。現在わずかに大字平谷に光岩寺の山門が往時の姿を偲ばせている。

明治22年8月には、村に前後、未曾有の大水害がおこり、大きな被害をもたらした。三日間、降り続いた集中豪雨は各所に山崩れをおこし、河川は堰止められて湖水を作り死者168人を出した。家が潰れ田畑を流されて生計の望みがなくなった罹災者、600戸、2,500人は北海道樺戸に分村移住を決め、その年の初冬11月に開拓に入った。その名も母村にちなんで〔新十津川村〕と名付けられた。現在では、北海道一番の米どころとなり、その発展はめざましいものがある。

前述したように、その険阻な地形は、長い間陸の孤島と呼ばれてきたが昭和31年に始められた奥吉野総合開発によって、五条～新宮間の国道を一挙に完成させるとともに、風屋、二津野ダムが電源開発K.K.により建設された。更に現在、旭川に奥吉野発電所(揚水式、出力1,206千KW)が関西電力K.K.により建



設中で昭和55年2月に完成の予定である。国のエネルギー政策に山紫水明の山河も、貴重な田畑も、住み馴れし民家(約400戸)を提供し協力してきたわが村、現在は高度経済成長のひずみをもろにうけて、若年労働者の流出、主産業である林業の長期不況によって近年一段とその活力を喪失している。このような状況の中であって、将来への展望として考えられることは、まず国道の早期改修である。紀伊半島を縦断する幹線交通路の開発によって、資源不足の深刻化する今日、本村がもつ、潜在力をいかに生かしていくかが今後の最大の課題であろう。

\*十津川村企画課長

広 報

関西支部会員名簿の発行について

かねてより各界から要望のありました関西支部会員名簿を下記のとおり発行することになりました。ご希望の方は、土木学会関西支部へお申し込み下さい。

1. 発行日 昭和54年10月20日 (データは9月10日現在)
2. 体裁 B6判, 約700ページ
3. 構成 ① 職場班会員は職場班別(勤務先別)および部課別順(同一課内は50音順)  
② 個人会員(職場班に属さない会員)は50音順
4. 掲載データ 勤務先データ(所属部課名・職名・電話番号・所在地)とします。ただし、勤務先のない方・勤務先所在地が登録されていない会員は自宅データ(住所・電話番号)を掲載します。
5. 頒 価 会員 1,300円, 非会員 2,000円, 送料 250円
6. 申込方法 ご希望の方は頒価に送料を添えて、土木学会関西支部へお申し込み下さい。なお職場班会員の方は、班長を通じて一括申込書によりお申し込み下さい。

昭和54年度 支部関係役員紹介

<p><b>支 部 長</b> 岡田 清(京 大)</p> <p><b>副支部長</b> 栗林 春日子(大阪市)</p> <p><b>商 議 員</b> 浅野 石夫(修建専)</p> <p>岩田 好一朗(阪 大)</p> <p>奥 山 清(和歌山県)</p> <p>亀 田 弘行(京 大)</p> <p>澤 慶一郎(兵庫県)</p> <p>関川 佳生(フジタ工業)</p> <p>高橋 恒夫(鉄建建設)</p> <p>田中 輝彦(鹿島建設)</p> <p>西 澤 寛(阪神電鉄)</p> <p>橋口 三郎(オリエンタル コンクリート)</p> <p>播本 章一(駒井鉄工)</p> <p>卷上 安爾(立命館大)</p> <p>柳 森 嘉勝(福井県)</p> <p>渡 辺 敦(近 鉄)</p> <p>芦 田 和男(京 大)</p> <p>影 澤 清光(鉄建公団)</p> <p>川 畑 博信(大阪府)</p> <p>工 藤 哲(日本橋梁)</p> <p>高 藤 傳(道路公団)</p> <p>畠 昭治郎(京 大)</p> <p>山 田 祐一(滋賀県)</p> <p>岩 佐 義朗(京 大)</p> <p>西 岡 和彦(阪急電鉄)</p> <p>軽 部 大蔵(神戸大)</p> <p>池 田 靖忠(国 鉄)</p> <p>今 宿 芳弘(鴻池組)</p> <p>児 島 孝之(立命館大)</p> <p>中 田 修三(建設技研)</p> <p>西 田 幹夫(兵庫県)</p> <p>松 本 勝(京 大)</p> <p>山 田 優(阪市大)</p>	<p>前田 哲郎(近 鉄)</p> <p>足立 紀尚(京 大)</p> <p>大倉 良之(西松建設)</p> <p>片 平 洋(新日本技術)</p> <p>川 端 一生(国 鉄)</p> <p>七 里 徳蔵(滋賀県)</p> <p>曾我部 隆久(三港建)</p> <p>竹 中 敏正(道路公団)</p> <p>手 島 聖二(日建設計)</p> <p>西 田 一彦(関西大)</p> <p>長谷川 進(横河橋梁)</p> <p>藤 井 学(神戸大)</p> <p>松 浦 勢一(神戸市)</p> <p>吉 田 喜七郎(大阪府)</p> <p>岡 田 清(京 大)</p> <p>金屋敷 忠儀(建設省)</p> <p>川 本 正身(近畿大)</p> <p>小 寺 稔(大阪市)</p> <p>戸 田 順一(清水建設)</p> <p>前 田 幸雄(阪 大)</p> <p>藤 井 俊朗(近畿地建)</p> <p>田 宮 芳彦(大林組)</p> <p>伊 東 司郎(三港建)</p> <p>岡 本 利彦(神戸市)</p> <p>総 田 完治(松尾橋梁)</p> <p>中 村 幾雄(関 電)</p> <p>堀 田 宣道(道路公団)</p> <p>三 上 市 蔵(関西大)</p>	<p>井 上 準治(京都市)</p> <p>岡 田 純佳(竹中土木)</p> <p>加 藤 隆夫(大阪市)</p> <p>近 藤 俊郎(奈良県)</p> <p>清 水 士朗(大阪市)</p> <p>園 田 恵一郎(阪市大)</p> <p>竹 本 明朗(近畿地建)</p> <p>仁 枝 保(阪工大)</p> <p>西 田 哲夫(京都府)</p> <p>林 正雄(国 鉄)</p> <p>本 郷 忠夫(関 電)</p> <p>松 橋 数保(阪神高速)</p> <p>吉 宗 一哉(住宅公団)</p> <p>小野寺 駿一(三港建)</p> <p>河野 三千世(中央復建)</p> <p>金 馬 昭郎(京阪電鉄)</p> <p>小 薮 泰明(大林組)</p> <p>戸 谷 松司(兵庫県)</p> <p>毛 利 治(神戸市)</p> <p>会計担当主査</p> <p>編集担当主査</p> <p>井 上 矩之(京 大)</p> <p>北 井 克彦(大阪府)</p> <p>玉 井 元治(近畿大)</p> <p>西 澤 勝巳(大阪市)</p> <p>堀 川 浩甫(阪 大)</p> <p>山崎 真喜雄(阪神高速)</p>
--	---	--

## 昭和54年度 支部事業計画一覧表

	54年			55年
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
講演会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ソントーク博士講演会* 4/13</li> <li>●フォンダール教授講演会* 4/25</li> <li>●通常総会講演会 5/9</li> <li>●年次学術講演会 6/18</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●リー教授講演会* 7/25</li> <li>●業務研究発表会* 8/28</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高専学生対象講演会 10/15</li> <li>●滋賀地方講演会* 10/30</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●技術革新講演会 1/18</li> <li>●施工技術報告会* 1/29</li> </ul>
講習会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●風化花コウ岩とマサ土* 4/12, 13</li> <li>●有限要素法* 5/29, 30</li> <li>●6/5, 6</li> <li>●土と基礎の設計計算* 5/31～6/2</li> <li>●固体力学の基礎と最近の進歩* 6/26, 27</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●仮設構造物の計画と施工* 7/10～13</li> <li>●都市施設計画の総合評価と住民参加 7/26, 27</li> <li>●PC標準示方書講習会* 8/31</li> <li>●補剛設計法の理論と実際 9/27, 28</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●信頼性工学の基礎と構造工学的応用* 12/4, 5</li> </ul>	
研修会				<ul style="list-style-type: none"> <li>●土構造物における安定解析の事例研究 1/21, 22</li> </ul>
研究・懇話会				<ul style="list-style-type: none"> <li>●新都市計画法 1/23</li> </ul>
見学会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第1回学生見学会 (大阪南港ほか) 5/15</li> </ul>			
映画会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●一般映画会 6/18</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生映画会 11/1～24</li> </ul>	
懇親会	<ul style="list-style-type: none"> <li>●総会懇親会 5/9</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>●会員懇親会 1/18</li> <li>○支部懇話会</li> </ul>
シンポジウム 座談会		<ul style="list-style-type: none"> <li>●都市環境づくりの実践 8/7</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○座談会</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>●役員選挙 4/9</li> <li>●通常総会 5/9</li> <li>●本部総会 5/29</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学校班・班長会議 7/18</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●支部だより15号発刊 10/1</li> <li>●支部名簿発刊 10/20</li> <li>●全国大会 10/16～18</li> <li>●関西の土木工事概要 79年度版発刊 12/1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●支部だより16号発刊 4/1</li> <li>●交通実態調査講習会 5/16</li> <li>●55年度年次学術講演会 6/5</li> </ul>

1. 年間の事業計画として、すでに実施済みのものも掲載した。
2. 表には項目だけを掲げた。詳細決定次第、行事案内または会誌により案内する。
3. \*印は共催、協賛を表す。
4. ○印は現在未確定のもの。
5. 事業計画についてのご意見、ご希望は、支部幹事または事務局にお申し出下さい。